

郷土資料館だより

Vol.34 No.2
2012.2.25

郷土資料館開館40周年記念企画展「三島暦～三島暦で旧暦を読む」報告

- 開催期間 平成23年10月29日(土)～平成23年12月4日(日)
- 会場 郷土資料館1階展示室 ●展示資料点数 83点 ●入場者数 8,388人

開館40周年記念企画展として三島暦をテーマとした企画展を開催しました。三島暦は仮名版暦としては日本で最も古いものであり、少なくとも鎌倉時代までは遡ることができると考えられています。三嶋大社との関連や江戸時代に宿場のみやげものとして有名だったことなどから三島の地理、歴史、文化的な要素と深い関係があり三島を代表する文化財のひとつです。

今回は、三島暦の歴史に関する資料として「永享9年 三島暦」(複製)から江戸時代の三島暦、明治以降の河合家から頒布された暦など多くの三島(で



展示風景

発行された) 暦を展示しました。その他にも旧暦そのものを理解してもらうために明治6年の旧暦から太陽暦への改暦に関する資料や三島暦以外の地方暦、江戸時代の暦に関する解説書などを展示するとともに、暦の読み方について解説するコーナーも設けました。

また、企画展関連講演会や展示室での暦クイズなど関連する企画も展示と並行して実施し、見るだけではない展示となるように努めました。



天明九年(1789)三島暦

企画展「三島暦～三島暦で旧暦を読む～」関連事業 報告

◆講演会「三島暦を楽しむ」 講師 女子美術大学名誉教授 岡田芳朗氏

- とき 平成23年11月3日(祝・木) ●ところ 市民文化会館大会議室 ●参加者数 59人

講演会当日の「文化の日」の由来から始まり、三島暦の歴史や旧暦に書かれた内容と人々の暮らしとの関わりなど、深い知識に基づいた具体的なお話をいただくことができました。参加者からの質問もたくさんあり、「昔の生活を思い浮かべる機会になった」などの声も寄せられ好評のうちに終了しました。

◆みしまるくんからの挑戦状 暦クイズに挑戦

- 会期中開催 ●参加者数 255人

暦クイズは展示の中に答えやヒントがあるもので、記念品を用意したこともあり多くの方に参加いただけました。

◆みんなで作ろう「新・七十二候」

- 会期中開催 ●参加者数 22人

現代らしいユニークな「新・七十二候」が寄せられました。以下に一部を紹介します。

霜降・初候 (10/24～28)	「一年が過ぎるのが早いと感じる」
同・次候 (10/29～11/2)	「中間テスト」
同・末候 (11/3～7)	「中間テスト返却」
立冬・初候 (11/8～12)	「そろそろ鍋開始。まずは王道寄せ鍋」
同・次候 (11/13～17)	「カレー鍋やらトマト鍋やら」
同・末候 (11/18～22)	「かあさんまた鍋！いい加減にしてよ」
小雪・末候 (12/2～6)	「今日は紅葉がきれいな素敵曜日」「富士の白さに目ひらく」

※七十二候の日には、年により変動します。

中学生職場体験「ゆめワーク三島」報告

三島地区の中学生職場体験事業「ゆめワーク三島」として南中学校4名、錦田中学校2名、山田中学校3名計9名の2年生が来館しました。

来館日は企画展「三島暦～三島暦で旧暦を読む～」の開催期間中でしたので、「みしまるくんからの挑戦状 暦クイズに挑戦」のお手伝いをしてもらいました。展示室に入ってきたお客様にクイズを勧めたり、わからなさそうにしている方にヒントを出したり、答え合わせをして記念品を渡したり、といったことをしてもらいました。普段はクイズ用紙を展示室入り口に設置してあるだけですが、中学生に声かけをしてもらった期間中は他の日よりも多くの方に参加していただけました。

そのほかに資料の整理やクリーニング、ガラス拭き、刊行物の訂正シール貼りなど裏方の作業にも加わってもらいました。地味な作業もありましたが「お客さんに喜んでもらえるように」と一生懸命やってくれました。

「これからは、相手に喜んでもらえるように頑張りたい」「地味な仕事も大事ということを教わった」といった感想があり、学校生活とは違う体験の中で一人ひとり何かをつかんでもらえたようでした。



体験風景（山田中）



体験風景（錦田中）

市制施行70周年記念企画展「三四呂人形の見た近代」報告

- 開催期間 平成23年6月11日(土)～9月25日(日)
- 会場 郷土資料館1階展示室
- 展示資料点数 80点
- 入場者数14,734人



メリーさん

市制施行70周年記念の第2弾として開催した今回の企画展では、三島市が誕生する直前の時代、大正・昭和初期の社会を三四呂人形を通して紹介しました。この時代には野戦重砲兵連隊の駐屯、北伊豆震災とそこからの復興、丹那トンネルの開通と三島駅の開業など現在の三島を語る上で欠かせないできごとがいくつもあった時代でした。

今回の展示は開催期間が夏休みを含む約3カ月半と長かったこともあり、期間中の入館者数は14,734人を数え、多くの方に展示を見ていただくことができました。

また、同時期に佐野美術館では「歿後30年 平田郷陽の人形 にほひたつ色香」と題した展覧会が開かれていました。平田郷陽は野口三四郎ともつながりの深い人形作家で、この2つの展覧会に合わせて日本人形玩具学会が開催され、6月12日には会員の方々に本企画展を見学していただきました。今回偶然にも佐野美術館と関連のある企画展を開くことができましたが、今後は近隣館との連携ももっと積極的に図っていかねばならないと考えています。



三島駅開業 昭和9年(1934)

博物館学芸員実習報告

今年度の博物館学芸員実習は、7月26日から8月5日まで行いました。実習生として参加したのは山下玲さん、大嶽知己さん、宮島美里さん、増田雄飛さんの4人です。

実習の前半は資料の取り扱いや館の日常的な仕事全般を経験してもらいました。資料の取り扱いの一環として、企画展「三四呂人形の見た近代」の中間の展示替えの補助もしていただきました。取り扱う資料の中には初めて手に取るようなものもあり、緊張している様子も見受けられました。短時間で十分な技術を身につけるまでには至りませんでした。資料に対しての心構えなど多くのことを吸収してもらえたようです。また、日常業務のなかにはガラス拭きや収蔵庫の清掃、蛍光灯の交換などの地味な作業もありますが、皆さんに積極的に取り組んでいただき、これらの作業の意義についても理解してもらえたと思います。

後半は郷土教室「夏休み体験デー」に向けての準備と当日の運営補助をしていただきました。火おこしの練習、勾玉キットやスタンプラリー用の消しゴムはんこの作製など準備も大変でした。当日はたくさん子どもたちに来てもらうことができ、勾玉セットを急遽追加作製するという予期せぬできごともありましたが、各々が持ち場で子どもたちの指導に力を注いでくれました。

実習生の皆さんには館で学ぶだけでなく、郷土資料館に足りないものやもっとこうしたらいい、という提案もしていただきました。「いつでも体験ができたらよい」「館に季節感があつた方がいい」「高齢者も多いので休憩用のいすが必要」「商店街にポスターを貼ってもらう」「ミュージアムグッズをつくる」「他館と連携してスタンプラリー」「楽寿園の自然や昔の姿をテーマにとりいれる」など多くの具体的な提案をいただきました。短い期間でしたが館の隅々まで見ての提案です。現在進めているリニューアル計画にできるかぎり反映させたいと考えています。

郷土教室「夏休み体験デー 古代体験」報告

●とき 平成23年8月5日(金) 10:00~14:30

●ところ 郷土資料館前、会議室、3階展示室

●参加者数 約80人

夏の郷土教室として「古代体験」を開催しました。今回は、博物館実習生お手製消しゴムはんこを使ったスタンプラリーを楽しみながら「火おこし」「勾玉づくり」「黒曜石ナイフ」「土器あてクイズ」を体験してもらいました。たくさんの方が楽しみにしてくれていたようで、スタート時には長蛇の列が…。実習生の4人もスタッフとして加わり、賑やかな1日となりました。

当日の一番人気は断トツで「勾玉づくり」でした。資料館前には粉まみれになるのもおかまいなしの小さな“職人集団”が出現。出来上がった勾玉は、参加者の胸を誇らしげに飾っていました。火おこしは舞がり体験です。煙が出てきてから勝負どころで、そこから全力で手を動かします。



火おこし体験の様子

火種ができれば息を吹きかけて炎にしました。リズムをつかむまでがなかなか難しく、力も必要なのですが、簡単には諦めない子どもたちの姿には脱帽でした。黒曜石のナイフで切ってもらったのは、キャベツです。小さくても切れ味の鋭いナイフには感嘆の声があがりました。

子どもたちからは「意外と難しかったけど最後はきれいにできてよかった」「疲れたけどおもしろかった」などの声が寄せられました。真夏の古代体験が、少しでもみなさんの心に残ってくれたら嬉しいです。

寄贈資料紹介

平成23年9月から平成24年1月にかけて次の方々よりご寄贈の協力をいただきましたので、ここで紹介します。ありがとうございました。

小林孝氏（三島市）

農具など（ホウリマンガ、茶樽、馬用ブラシなど）23点
俵編み器、モミ干し、しょう油を作るときに樽をかき回すための棒など農家の仕事や生活にかかわる道具を多数いただきました。このうち、2人用のホウリマンガには背丈の異なる者同士が作業しやすいような工夫があるなど、独特な資料も含まれていました。



ホウリマンガ

秋山統氏（三島市）

豆州志稿13冊、伊豆国全図ほか 計18点

豆州志稿は寛政年間に安久の秋山富南によって編纂された伊豆の国の代表的な地誌で、現在でも伊豆地方史研究に欠かせない基本資料となっています。そのほか、伊豆半島全体を描いた伊豆国全図や豆州志稿作成に関連する資料を寄贈していただきました。



豆州志稿

小林寿子・小川豊司両氏（横浜市）

しょう油製成帳、肖像画ほか 計6点

加屋町の旧家でかつてしょう油の醸造をおこなっていた川口氏の、明治時代のしょう油醸造に関する資料や当時の当主、川口周作氏の肖像画など明治時代の商工業を知る上で貴重な資料を寄贈していただきました。



帳面

杉本泰雄氏（三島市）

国債拾円（昭和16年）

第二次世界大戦中に発行された戦時国債を寄贈していただきました。戦争中の国の政策と市民の暮らしとの関係を示す資料として貴重です。

加藤雅功氏（沼津市）

浮世絵 3点

安藤広重による東海道三島宿をテーマとした浮世絵を寄贈していただきました。



その他 昭和5年北伊豆震災 恩賜金 1点、市松人形 1点

伊豆半島ジオパーク構想 Vol.3

伊豆半島ジオパーク構想について、今回は「三島・沼津エリア」にあるジオサイト候補地10ヶ所のうち、「鮎壺の滝」と「三島」を取り上げ、そこに見られる「三島溶岩流と湧水」を紹介しました。今回は三島市の東域に広がるジオサイト候補地、「箱根南西麓－火砕流台地と景観、土地利用－」（小山2011）について紹介することにしましょう。

箱根火山はフィリピン海プレートの東縁に形成された伊豆・小笠原弧の北端部に位置しています。プレートとは地球の表面を構成する固い岩盤のことで、海嶺と呼ばれる海底の高まりから生まれ、これらが対流する地球内部の地殻と核との間の層であるマントルに乗って動いていると考えられています（プレートテクトニクス）。日本付近には「北アメリカプレート」・「ユーラシアプレート」・「太平洋プレート」・「フィリピン海プレート」の4枚のプレートが、交差点のように集まっていますが、太平洋プレートがフィリピン海プレートの下に沈み込むことによって摩擦が生じマグマが上昇、今から約60万年前に箱根火山が出現しました。約20万年前から約4万年前にかけて最も活発に活動し、直径11kmのカルデラと2つの外輪山、複数の中央火口丘をもつ現在の山体となったことはよく知られています。特に今から6万6千年前におこった噴火は箱根火山最大の噴火で、大規模な「火砕流」が発生し、横浜市戸塚区から富士市の富士川河口までの広い範囲を覆いました。「火砕流」は火山灰や小石混じりの高温のガスで、秒速100mもの早さで押し

寄せる最も危険な噴火現象です。したがってこの火砕流に覆われた地域の生物は、全て死滅してしまったに違いありません。この火砕流の堆積物は「箱根新期軽石流」と呼ばれており、三島市の徳倉や谷田、赤王など丘陵末端部にその厚い堆積を見ることが出来ます。そして、この軽石層は柔らかく掘削しやすいことから、今から約1,300年前の古墳時代末期に「横穴墓」と呼ばれる崖に横穴を掘削して作るお墓が盛んに築造されました（写真1）。三島市の赤王横穴群や函南町の柏谷横穴群が有名です。この「箱根新



（写真1）赤王清水洞横穴墓群

期軽石流」の上部には、おもに古富士火山が噴出した火山灰からなる赤土の地層が見られ、「箱根西麓ローム層」と呼ばれています。まるでバームクーヘンのような縞模様が見られますが、これは降下火山灰の間断と性質や供給地の異なる火山灰が堆積したため生じたもので、例えば「見晴学園」東側の露頭では、「三島パミス」と呼ばれる今から約4万年前に堆積した「冠ヶ岳」・「神山」など箱根山中央火口丘の噴出物がオレンジ色の特徴的な地層となって見られます（写真2）。

こうしたローム層は火山灰が主体で、ほとんど礫を含まないことから、ダイコンやニンジンなど根菜類栽培の最適地となっており、箱根新期軽石流の堆積によるなだらかな地形とともに火山の恩恵ともいえるでしょう。



（写真2）見晴学園東側の三島パミス

郷土資料館運営協議会視察報告

●とき 平成23年10月5日(木) ●視察先 静岡市立登呂博物館、静岡市美術館

郷土資料館運営協議会では、委員の研鑽と先進館の事例研究を兼ねて毎年研修視察を行っています。以下は、迫田委員長からの研修視察報告です。

静岡市立登呂博物館は昨年秋にリニューアルオープン。「参加体験型ミュージアム」をコンセプトに中学生以下は無料、大人も200円と観覧料が低く抑えられており、しかも1階フロアは全て無料になっている。リニューアル後、半年間の入館者数は約10万人とのことであった。

1階の「弥生体験展示室」では2千年前の登呂を再現。利用者は弥生の服装でボランティアスタッフと共に、弥生時代にタイムスリップしたような体験が出来る。2階の有料ゾーンは「登呂ムラと稲作」「登呂遺跡の記憶」を主テーマとする常設展示室と特別・企画展示室があり、おりから「発掘された日本列島2011」展が開催されていた。また、国の特別史跡「登呂遺跡」の中にあるので、発掘された水田や建造物の遺構がそのまま屋外展示物になっている。

静岡市美術館は、JR静岡駅前の再開発ビル「葵タワー」の3階フロ

アに昨年5月にオープン。駅に近く、地下街を通過して雨でも傘なしで来館できるとあって開館した昨年度は29万5千人が訪れたという。

複合ビル内の美術館は全国的にも珍しく、不燃ガスによる消火装置を完備、コンクリートに囲まれた空間に特殊な壁に囲まれた美術館が入るといふ二重構造になっているとのこと。また、収蔵スペースが少ないので館蔵品を極力持たず、展示物の多くは借物とのことであり、国宝・重要文化財や外国から借りた美術品の展示が可能な規格になっている。したがって、展示は企画・特別展のみに限られ、おりしも「アルプスの画家セガンティーニ」展を開催中であった。

今回の視察の感想を一言で言えば、「豊かな財力無くして、文化は育めない」ということであろうか。

(委員長/迫田信行)

平成23年度 第2回郷土資料館運営協議会

●とき 平成23年12月22日(火) ●ところ 郷土資料館会議室

郷土資料館には館の円滑な運営を図るため、郷土資料館運営協議会が設けられています。今年度第2回郷土資料館運営協議会では、任期満了に伴う委員の改選を受け12人の委員に対し辞令交付が行われました。また委員長・副委員長については委員間の互選により、委員長に迫田信行委員が、副委員長に山田益美委員が選出されました。

今回任命された委員の方々には今後2年間、郷土資料館の運営等について意見や助言をいただきます。それらを参考にしながら館の資質向上に努めてまいります。



辞令交付の様子

任期 (自) 平成23年12月10日
(至) 平成25年12月9日

No.	区分	氏名
1	委員長	迫田 信行
2	副委員長	山田 益美
3	委員	諏訪部敏之
4	委員	井出多美子
5	委員	原 知信
6	委員	加藤 雅功
7	委員	渡邊 時子
8	委員	小田 リツ
9	委員	近藤 辰哉
10	委員	小松 康純
11	委員	奥村 徹也
12	委員	増島 淳

(敬称略、順不同)

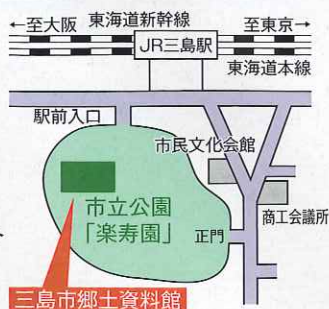
【編集後記】 最近は、昔のくらしの道具について学びにくる小学3年生で当館も賑やかです。当館では移転改築が取り止めとなりましたが、耐震補強と併せて体験学習を主としたソフト事業の展開を見込んだリニューアルを行うことになりました。子どもから大人まで気軽に楽しんで学べる施設づくりに励んでいきます。

利用案内

●休館日
毎週月曜日
(祝日の時は翌日)
12月27日～1月2日

●開館時間
午前9時～午後5時
(4/1～10/31)
午前9時～午後4時30分
(11/1～3/31)

●入館無料
(ただし、楽寿園入園の際に有料)



●三島駅(南口)から徒歩5分。
市立公園楽寿園内

郷土資料館だより vol.34 No.2 (第101号)

発行日 平成24年(2012)2月25日
(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館
〒411-0036
静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228
FAX 055-981-3730

E-mail: kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL: http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/
発行 三島市教育委員会